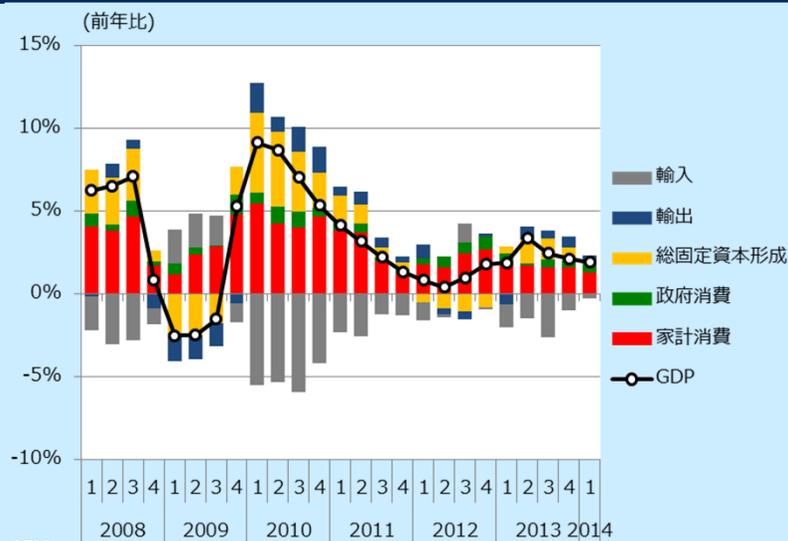


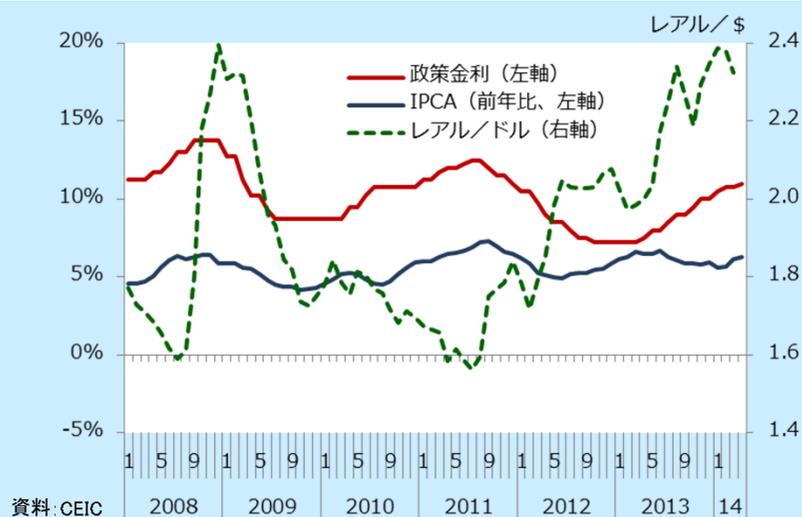
ブラジル：GDP（2014年1-3月期）

MRI Daily Economic Points
June 4, 2014

実質GDP成長率



政策金利、物価（IPCA）および為替の推移



評価ポイント

今回の結果

- ブラジル地理統計院 (IBGE) が発表したブラジルの14年1-3月期の実質GDPは、前年比+1.9%と前期 (同+2.2%) より一段と減速、季節調整済みで見ても、前期比+0.2%と前期 (同+0.4%) から伸びが鈍化した。
- 家計消費は、インフレによる消費マインドの低迷などもあり、前年比+1.9%と前期 (同+2.4%) より伸びが鈍化。
- 総固定資本形成は、製造業を中心に生産活動の低迷が見られたことに加え、建設工事の鈍化により、前年比▲2.0%と12年10-12月期以来のマイナス。
- 外需については、緩やかながらリアル安による輸出回復がみられ、輸出は前年比+3.1%の増加、輸入も同+1.1%の増加となった。

今後の見通し

- ブラジルの消費者物価は、4月前年比+6.28%と、中央銀行の政策目標 (中央値) である同+4.5%を大きく上回った推移が続いている。ブラジル中央銀行は既往のインフレ抑制の目的で、4月には政策金利を11%へ引き上げ、景気に目配せをしながらも高金利政策を維持しているが、投資や消費への影響が顕在化している。
- 14年6月からのW杯、16年の五輪などインフラ整備需要の盛り上がりを背景として、13年中は総固定資本形成がプラス寄与を続けてきた。しかし、Wカップ関連でみると工事の大幅な遅れや工事規模の縮小などから、実際のインフラ投資規模は当初想定を下回っている模様で、足元の生産活動の低迷を補うほどの効果はみられず、今後も大幅な押し上げ効果は期待できない。
- ブラジルでは、金利の高止まりによる内需押し下げ効果により、14年後半までは景気低迷が続くと見込まれる。また同国最大の輸出先である中国の景気減速の影響や、足もとで急減速しているアルゼンチン向け輸出の先行きなど、外需環境も当面不透明な状況が続くであろう。